

ドナウ の 四季

2011年・夏季号・No.11

言葉がもつ力	盛田 常夫	1
東日本大震災追悼コンサートを終えて	桑名 一恵	2
試練の時－日本の物作り	高根 友光	4
人間万事塞翁が馬	チェンドム アンドレア	6
日洪会話倶楽部	チョダーシュ ジュラ	7
体験入学に思う	アシュタロシュ 真美	8
ハンガリーにて想うこと	篠塚 哲一郎・篠塚 園子	9
留学生自己紹介		10
	小黒 絵美香・辻 佑太・佐藤 英之・佐々木 洋介	
2011年水球ワールドリーグ戦報告	長沼 敦	13
ゴルフ天国ハンガリー	高濱 吉廣	14
マラソンへの想い	菊地 智裕	15
私はなぜ走るのか	仲川 寿一	
スポーツ行事・運動サークル情報		16



コルナイが綴る 20 世紀中欧の歴史証言

池田信夫「21世紀最初の10年ベスト経済書」第2位にランク
「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン

コルナイ・ヤーノシュ自伝

— 思索する力を得てコルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】

◆好評発売中！ ◆定価 4935 円（税込） ◆A 5 判／ISBN 4-535-55473-0 日本評論社



体制転換 の経済学

黄色の教科書シリーズで知られる専門学部の定番テキスト。体制転換の理論と転換直後の現状を分析。各大学で教科書として使用。

盛田常夫著

第一部 社会主義経済の失敗

社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の比較分析に新たな視点を提供。

第二部 ポスト社会主義経済

体制転換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体制転換の違いを解明。

■新世社 新経済学ライブラリー20 定価2781円(税込)



なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20 世紀を創ったハンガリー人 マルクス・ジョルジュ【著】 盛田常夫【編訳】

■ 定価 3045 円（税込） A 5 判

■ ISBN 4-535-78331-4

異星人伝説

「週刊文春」（米原万里）、「週刊ダイヤモンド」（北村伸行一橋大学教授）で書評。
ハンガリーは 20 世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を輩出した。大きな足跡を残した科学者たちの評伝。

体制転換20年の歴史的・理論的総括の書

ポスト社会主義の政治経済学

体制転換20年のハンガリー：旧体制の変化と継続

新しい概念を駆使して、体制転換以後の中欧社会の状況を分析。

日本経済新聞(2010年3月21日)ほか、多数の書評。

旧来の定説を覆し、新たな知見を広める革新の書。

盛田 常夫著 日本評論社 定価3800円



言葉がもつ力

盛田 常夫

人の人としての限界が見える。

それにしても、官房長官や東電、原子力保安院の会見も、もっと工夫したらどうかと思う。まず、言葉遣いが駄目だ。枝野長官の言葉は、典型的な政治家の語法だ。「確認をいたします」（「確認をさせていただいているところでもあります」）、「善処をいたします」、「配慮をいたします」等々、言葉を言い切れない。何故、「確認します」、「善処します」、「配慮します」と言えないのか。「いただいている」、「いただいているところでもあります」と丁寧語を使っているが、言い切ることができない自信のなさを、冗長に言葉を継ぎ足すことで補っているという印象なのだ。この慇懃無礼で無内容なコミュニケーションに、革命的な明快さをもたらしたのが、「小泉革命」なのだ。しかし、国会議員だけでなく、広報を担当する多くの人も、そのことが分かっていないようだ。

内閣官房参与として、首相のアドバイザーに就任していた小佐古教授の辞任会見も奇妙だった。必要以上にウェットになりすぎていた。もし自分の主張が絶対に正しいと思うなら、具体的な事例や典拠を明示して主張すべきなのに、「私のヒューマニズムから許せない」と涙を拭くのはとても科学者の態度だと思われぬ。

その後の枝野長官の「暴露」にもあったように、いろいろな場面で自らの意見が取り入れなかったことが理由なのだろう。原子力を専門とする教授であっても、すべてのことに通じているわけではない。放射線の人体への影響を研究する専門家は非常に限られているし、人体実験ができる性格の研究でもないで、その筋の専門家でも正確なところは分からない。だから、原子力の専門家でありながら、「ヒューマニズム」という一般人の表現が出てくる。大学だけで仕事をしている研究者は専門が違う人や官僚・政治家と意見を摺り合わせて結論をだしていくという作業に慣れていない。だから自分の意見に耳を傾けてもらえないと、拗(す)ねてしまう。大学から行政の場に研究者を招聘する時には、その人の適応能力を見極めないと、逆効果になる。

4月半ばの復興会議に出席した東北3県の知事の対応も興味深かった。村井宮城県知事は復興と防災の観点から新しい街づくりの具体的な提案をおこなったのにたいし、達増岩手県知事は復興資金を増税で賄ってはならないと、どこかの国会議員の言葉をオウム返しするだけで、具体的な提案はゼロ。佐藤福島県知事にいたっては、原発問題を抱えているとはいえ、賠償を叫ぶだけで具体的な提案はなかった。原発を抱える地方自治体は、原発交付金の使い方を再考すべきだ。交付金はありがたく頂戴し、リスクがゼロで当然という思考は間違っている。リスクがあるからこそ、巨額の交付金が出ているはずだ。その何割かを留保し、リスクを担保するのが為政者の仕事ではないだろうか。3知事の言動からも、為政者としての能力が垣間見えてくる。

(もりた・つねお)

東日本大震災追悼コンサートを終えて

桑名 一恵

大震災の直後から、ハンガリーの友人や知人からたくさんのお見舞いの言葉をいただいた。「何か助けることができないか」「何をしたら良いのか」など、温かい気持ちをいただいた。音楽仲間ができることは、やはり音楽で心を表現すること。当地の留学生からもチャリティ・コンサートを開きたいという強い希望が届いた。ちょうど、4月初めに盛田さんのところへ国立合唱団からも同じ希望が届いていたので、それではオケと合唱団のコラボにしようということになった。演目はモーツァルトのレクイエム、場所はマーチャーシュ教会。ミサ曲なのでハンガリーの友人たちと一緒に震災犠牲者を弔うことができる。そこから日本人音楽家とハンガリー人音楽家の急造オケの編成を始めた。



まず、メインとなる4人のソリスト歌手探し。ソリストは演奏家の中でも一番のキー的存在。楽譜があればさくっと歌えるだけでは不十分なので、ここだけは自薦ではなく、適任者を探す必要があった。小林研一郎さんとの共演もあるリスト音楽院声楽科のパースティ・ユーリア先生にお願いし、学生を推薦していただいた。声楽科の若いソリスト4名は快く引き受けてくれたが、彼らにとって初めてのレクイエム。ユーリア先生が約1ヶ月間レッスンを付けてくれた。若手歌手が短期間で仕上げることは容易でない、ユーリア先生の支援に感謝した。

指揮者の選択は少し時間がかかった。合唱団の意向もあるし、コチシュでは大げ

さすぎる。ハンガリー国外で指揮を学んでいる日本人指揮者を呼ぼうと思ったが、盛田さんから合唱団の顔を立てて国立合唱団指揮者のアントル・マーシュアーシュさ

んにしようということになった。国立合唱団は国立フィルの下部組織だから、チャリティとはいえ、国立フィルの了解をとる必要がある。アントルさんへの正式依頼や国立フィルのサポートは盛田さんをお願いし、国立フィルの全面的なバックアップを受けることができた。芸術宮殿のリハーサル室の利用、オケ所蔵の楽譜の借り出し、大きな打楽器の借用など、国立フィルのサポートがなければ実現できない企画だった。

ここからアントルさんと随時連絡を取り合いながら、オケの編成を進めた。管楽器はリスト音楽院の各教授陣や講師陣に推薦していただき、弦楽器はリスト音楽院・ELTE大学・工科経済大学などの大学オーケストラに声をかけた。セルメチ・ヤーノシュ(元祝祭オケ・コンマス、NHKフィル客員コンマス)のようなプロの方にも声をかけた。皆さんたいへん協力的で、各大学の責任者がそれぞれの団員にメール連絡し、参加の意思を私に知らせるようにセッティ

大きなオケを編成することができた。

既述したように、楽譜や打楽器などは国立フィルが実際に使用しているものを提供していただいたので、取り扱いに気を遣った。楽器に傷がついたり、楽譜を紛失したりすると責任問題になる。初めて顔を合わす音楽家が多いから、オリジナルの楽譜を手渡すには不安が多い。だから、オリジナルの楽譜は当日のリハーサルから使うことにし、それまでは各自にコピーやでスキャンしてメールで送

った。これは少し手間がかかる仕事だった。

メンバーとのやりとりも携帯メッセージ(SMS)やメールなどなるべく経費のかからない手段をとった。さまざまな予定をもっている音楽家をリハーサルに集めるのは簡単ではない。コンサート前日と当日の2回のリハーサルしか予定が組めなかった。1回目のリハーサルはオーケストラとソリストの顔合わせで、約束事を取決める。2回目は国立合唱団も加わった全員でのリハーサルになった。初めて合わせる急造オケなのでどうなるのか予想がつかなかったが、それぞれのパートがしっかりと意識を持って臨んでくれた。もちろん、訓練を積んでいる音楽家ばかりだから、最初は息が合わなくても、練習を重ねるにつれて、次第にハーモニーが生まれてくる。そして、合唱団が入ると、オーケストラもソリストも引き締まり、形が整ってきた。

そして開演前1時間前、コンサート会場でのアコースティックリハーサル。ここに初

めて参加した音楽家もいる。慣れているプロは即座に対応できるから問題ない。教会の夕方のミサが長引き、この会場でのリハーサルは10分ほどで終わった。短時間でそれぞれの位置を確認し、音のバランスをとる。教会はコンサートホールより残響があり、お互いの音が聴こえづらいので、コンサート前の確認は重要である。

コンサートの前にこの企画の趣旨が語られ、1分間の黙祷。満員に埋め尽くされた会場の全ての人々が、いろいろな思いをもった静かな祈り。教会での祈りは、宗教や宗派にかかわらず、心を安らげてくれる。そして、その静寂のなかでモーツァルトが始まった。神聖さが漂う雰囲気、合唱とオケが交わっていく。荘厳な響きをもって、参加者の胸に響いた。ふつうのコンサートとはまた違ったレクイエムになったのではないかなと思う。日本とハンガリーの友人たちが、一緒に震災犠牲者を悼み、そして速やかな復旧・復興を願うタベになった。

今回の企画ではチラシなどに主催者や協賛・協力名を一切掲載しなかった。このコンサートでは誰が主役というのではない。演奏している音楽家も、このコンサートを聴く聴衆も、皆祈りの主役なのである。心ある人がそれぞれの思いを抱いて参加し、音楽家と聴衆がとともに成り立たせる祈りの集いだからである。とはいえ、多くの方々の強い意志とサポートがなければ、実現できないコンサートだった。改めて、協力いただいたすべての方に感謝したい。もちろん、これで震災被害者の追悼や支援が終わるわけではない。これを一步として、遠く離れたこの地ハンガリーで、自分たちが出来る事を行動に移していきたい。

末尾になるが、今回のコンサートではチケットを発行せず、参加者から義援金をいただくことにした。いただいた支援金(113,000円と445,000Ft)は、フォロント貨と円貨のまま当地の日本大使館経由で日本赤十字に送った。会場費や労務費は協賛企業や個人に負担していただいた。こ

の場を借りて、支援していただいた皆様に御礼申し上げます。

♪ モーツァルト レクイエム オーケストラ参加メンバー メッセージ ♪

☆ソプラノソリスト:星野 祐友香
とても短い期間でしたが、皆様のご協力のおかげで温かい空気に包まれ、会場の皆様と演奏者全体の気持ち为一体となり、素敵なレクイエムを奏でられたことをとても嬉しく思います。日本の方々にもきっと届けられたことでしょう!!

ハンガリーの方々の強いお気持ちがあったからこそ実現できたことなので、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。まだまだ日本の現状は厳しいですが、また音楽を通して少しでも被災者の方々のお力になれば嬉しいです。ご協力してくださった皆様、本当にありがとうございました。

☆合唱団ソプラノ参加 栗田 順子
国立合唱団に混じり、ソプラノに飛び入り参加させていただきました。遠い祖国で復興をがんばっている人たち、親族・友人をなくした被災者のことを想いながら歌ったレクイエムは、過去何度か歌ったものは違う、特別な感情をこめて歌うことができました。
チャリティ・コンサートに携わった方々へ、感謝の気持ちをこめて。。

☆合唱団バリトン参加 犀川 裕紀
出演者の皆様及び、関係者の皆様、この度は出演の機会を与えて下さり、ありがとうございました。前代未聞の大震災が発生した一報を聞き、映像を見た瞬間は、にわかには信じられない事態を目の前に、思わず絶句してしまいました。日本より遠く離れたこの地で、どうか自分の小さな力でも何か出来る事は無いかと模索しておりましたがそれはなかなか難しく、歯痒く悔しい気持ちで一杯の中、今回の演奏会の知らせを聞きました。

私は合唱団の一員としての参加でしたが、練習中や本番前、ハンガリー国立合唱

団の皆様が日本の震災や津波、原子力発電所の問題に関して質問して下さい、「家族は大丈夫であったか」、「他に自分達に出来る事があれば何でも言って欲しい」等の言葉をかけて下さり、とても感激致しました。演奏会には沢山のハンガリーの方々もいらっしやっており、日本、ハンガリーの友好関係を今一度強く実感させられたと共に、これからもこの関係が長く続いて欲しいと強く感じます。

最後に、震災の被害に合われた皆様に、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

☆ヴァイオリン担当 山内 あずさ
日本人としてマーチャーシュ教会で演奏できた事を光栄に思います。私の生まれ育った日本では今、人々が大きな苦しみに耐え前に進もうと努力しています。日本を遠く離れた私も日本の困難な人々と心をつなげて演奏させて頂きました。音楽の力が希望と祈りを届け明日への光の道となるよう願っております。
ありがとうございました。

☆チェロ首席担当 浜崎 佳恵
東日本大震災から約2ヶ月が経ちました。遠く離れたここハンガリーで私には何が出来るだろうかと考えていたところ、追悼コンサートに参加させて頂き光栄でした。
普段からハンガリーの方々の温かみを感じて生活をしておりますが、震災後は先生をはじめ、友人知人、また知らない方までもが日本のこと、私の家族と友達について心配をしてくださりました。今回のコンサートを通じて、多くのハンガリー、他の国の方々協力してくださり、人々の温かみや想いを感じ大変有難く思いました。

世界中が日本のために祈り、行動を起こしてくださっていると身にしみて感じています。そして、音楽にできること、自分にできることを深く考えました。

黙祷を捧げてくださったお客様、募金をしてくださった方、企画をくださった方、演奏をしてくださった方、皆様に感謝いたします。

(くわな・かずえ)

試練の時－日本の物作り

高根 友光

かつては世界に燦然と輝いた「日本の物作り」も、中国・韓国・インドの急成長、アップル、グーグルの斬新的なアプローチの前に、かつての輝きを失っている。「日本の物作り」に身をおく私にとって、頭から離れない重いテーマとなっています。「輝き」の復活を込めて、私の思いをまとめてみました。

大きく変わった世界の物作り

何でも手に入る世の中になってきました。機械・ハイレベルな部品・技術・人さえも、「バクリ」文化も当たり前となっっています。豊富な資金ですべてが揃います。低所得地帯でマニュアルに従い単純労働する「物作り」は、いとも簡単に世界に通用する製品が誰にでも作れる世の中になりました。これを私は「物作りのレシピ化」と名づけています。

この変質を最大限に活用しているのが中国・韓国・台湾などの新興国であり、生産拠点をグローバルに海外展開したメーカーです。工業基盤のない国でも、製造経験のないソフト関係のメーカーでも、世の中に通用する製品を作ることが可能になってきました。この結果、「物作りのレシピ化」は最終的に何の魅力もない平凡な商品の廉価競争に突入しました。日本人はこの種の競争は苦手です。それは「日本の物作り」精神と違うからだと思います。コピーでない「物作り」には思い入れや情熱が必要です。それを欠いた「物作り」には、作る者の気持ちが入っていないのです。

日本の物作り

「仕事・技術は教わるのではなく、盗むもの」、「改善活動」、「小集団活動」、「朝礼」、「年功序列」、「家族主義」、「終身雇用」など、「日本の物作り」にはいろいろなキーワードがあります。そして、これらには共通した一本の芯が存在します。それは「人・人間」です。日本の伝統文化や武道の最終目標が人としての大成と結びついているように、「日本の物作り」にも「人・人間」としての成長が

存在することに何の不思議もありません。「物作り」の中心が人間である限り、人と人との関係が一番重要な軸になります。その意味で、単一民族で文化的な同質性が高く、平準化された高い学歴や訓練された集団組織活動が、「日本の物作り」を開花させた条件であると思います。逆に言えば、そのような条件がないところでの「物作り」には大きな限界があるということです。まさに、「仏作って魂入れず」ということになりかねません。

「日本の物作り」に世界が注目し、各国で導入を試みましたが、成功した話を聞いたことがありません。日本企業の海外工場も思うような成果が得られず苦戦している状況です。当地ハンガリーへ進出した企業も、思い描いたマネージメントが出来ずに苦勞しています。

これにたいして、中国、韓国、台湾、アメリカなどレシピ化された「物作り」の企業は人間の労働を無機質な作業工程化とし、数値目標の効率アップで実績を残しております。「物作り」に心血注いできたオリジナルの職人には、何とも歯がゆいことです。

日本の物作りには、社員のレベルアップが必須の条件です。ところが、海外生産でこのレベルアップがなかなか実現できないのです。明らかにマネージメント力のどこかに、問題があるのです。何が問題なのでしょう。社内コミュニケーションシステムの確立、始業前の打合せ(作業の作戦会議)、会社方針の徹底(マインド革新)、信頼関係の構築、各セクション間でのチームプレイのトレーニングなどは、どの企業も粘り強くやっているはずで、弊社も日本の学校教育をベースに、社員教育 職業訓練 社内会議等社員のレベルアップはしっかりやってきました。グローバル展開した企業の社員の多くが他民族の場合、社員教育などを通じて社員のレベルアップはさらに強化する必要を痛感いたしております。それでもなお不足するものがないでしょうか。レベルアップしたものをしっかりと

評価し、優れた人材を引き上げ、管理者や国外でも通用する戦力として評価するシステムができあがっているでしょうか。

「努力し、技能を向上させた者は報いられる」、「能力があれば、国際的に活躍する場も保証されている」というインセンティブはあるでしょうか。これなしに、ただ「労働規律を守れ」というだけでは、人を動かすことはできません。日系企業でも海外で実績を上げている企業は、外国人社員の教育や登用を積極的に行っていると思いますが、どうでしょうか。

「日本の物作り」に磨きをかける

「レシピ化された物作り」は、工業基盤のない新興国も一気に工業大国を実現する勢いをもっています。海外市場で苦戦し、試練を迎えている「日本の物作り」に輝きが復活する日が来るのでしょうか。

「レシピ化された物作り」と「日本の物作り」を融合させることはできないでしょうか。異なる民族の血や精神を入れることによって、「日本の物作り」に新しい可能性を開くことができないでしょうか。というのも、アップルやグーグルの最近の躍進を見ると、日本企業がやれるような分野であるような気がしてならないからです。

日本もそうですが、ハンガリーでもいろいろなタイプの人間がいます。「粘り強く自分の会社に合った社員を集める」、「試用期間中に適性を見極める」、そして「残った社員と日本の物作りについてお互いが納得するまで話を尽くす」。これが私の方針です。私の経験では、こうして残った社員の八割は、私の言うことを理解してくれます。腹を割ってとことん話せば、ハンガリー人は日本人と理解しあえる良い相性をもっています。

なかでも、「企業・会社の社会的責任」、「仕事と生きがい」、「家族への責任と賃金」、「企業間の国際競争に勝ち残ること」などは、率直にかつ大胆に話し込んでいく必要を痛感しています。持っている思いをとこ

とんぶつければ、相手も心を開いてくれます。利己主義的な個人主義が強い傾向があるハンガリーで、この種のテーマは今まで話題になる機会が少なかつただけのことです。家族と会社が共存共栄していく道を説得できれば、ファミリーを大切にするハンガリーの社員は理解してくれます。そして、納得して協力してくれば、仕事に楽しみとやりがいを感じてくれます。そうなること、働くことの意識が変わってきます。

労働契約の表面的履行だけでは「日本の物作り」はできません。お互いの信頼関係を、共通の目標、達成する喜びを共有できる人間関係を築くことが、ハンガリーでの「日本の物作り」構築の基礎と考えています。しかし、そのためには、我々自身、日本から派遣された者も意識を変える必要があります。会社もまた日本から派遣する社員のローテーションについて、根本的に考え方を考える必要があると考えます。

日本人マネージャーは信頼されているか

「日本の物作り」を体得しているのは日本人であり、日系企業ならば経営上の権限・主導権は日本人赴任者が握っております。だから、物作りがうまく行かない原因をハンガリーとの文化の違いや社員の能力・資質に求めがちです。「だらしない姿勢で仕事をする」、「おしゃべりをしながら仕事をする」、「音楽を聴きながら仕事をする」、「飲み物や食べ物をいきて仕事をする」、「ずる休みをする」。これらはいわゆる5Sのしつけに相当する部分です。

「日本の物作り」を実行する上で、私はこの部分での妥協は絶対にしません。これについては、日本人が直接マネージメントを行い、責任を持つべきです。私の経験から言えば、2～3年の赴任期間ではハンガリー社員との信頼関係の構築はできないと思います。それは「日本の物作り」の原点を考えれば、当然のことです。社長も社員もみんな工場でおぼろけになり、寝食を忘れ、技術開発に夢中になって改善・改良を進めるといのが、「日本の物作り」の原点です。工場の現場にどっしり腰をすえて、ハンガリー社員と四つに組み、腹を割って話をする

心構えがないと、他民族との信頼関係構築は難しいと思っております。

このような労働管理をローカルのトップ任せにしているケースを見聞しますが、これは小学校時代の先生不在の「自習時間」みたいなもので絶対に期待できません(私にとって自習時間は最高の時間でした。級長の言う事は無視しておりましたし、何しろ仲間でしたので教室中やりたい放題の時間でした)。

我々はよくハンガリー人は無責任だと非難します。他方、ハンガリー人社員は日本人マネージャーをどう見ているのでしょうか。日本人マネージャーにとって、ハンガリーの会社は数年したら日本に帰る一時の職場、仮の職場。だから、サラリーマン経営者とみているのではないのでしょうか。そのような経営者の下で、身を粉にして、会社の繁栄のために働こうと思うでしょうか。否です。一方にだけ求めても、我々の意を理解してもらうことはできません。我々もまた身を正し、ハンガリー人の中に入っていかなければ、「日本の物作り」を理解してもらうことはできません。しかし、「サラリーマン・マネージャー」である限り、これは永遠に実現不可能です。海外に進出している日本企業の最大の弱点はここにあるのではないのでしょうか。

「ずる休み」をどうやって減らすか

私は今年、商工会の労働部会の責任者の役を仰せつかりました。5月31日に開催された部会は30余名の参加者を得て、活発な議論が戦わされました。当地に進出されている企業の皆さんはいろいろな問題を抱えています、なかでも最大の問題が労働管理なのです。

この労働部会のなかで、実にさまざまなお問題が提起されました。多種にわたるとはいえ、共通しているのは労働規律遵守をどうやって実現できるか、契約に縛られた労働条件のなかで日本的経営に特徴的な可変的で弾力的な労働組織の改編をいかに実現できるか、「ずる休み」をどうやって削減できるかという問題に集約することができます。ハンガリー人弁護士講師は、「ず



る休み」という概念はハンガリーにないということを強調していましたが、我々が問題にしているのは、「合法的」な形をとった「虚偽の病欠」です。チェコのトヨタでは経営と組合でチームを組み、病欠者の家庭訪問する方法で、「ずる休み」を減らしているという報告があります。一考の価値があります。

しかし、「ずる休み」をなくする最大の方法は、やはり日本人経営者の思いを率直に語りかけ、心から理解してもらうことです。圧力をかけて一時的に「ずる休み」を減らしても、それで根本的な問題が解決されたとは考えられません。「働かなければ生活費の賃金は保証されない。レベルの低い仕事では競争に負けて失業する。仕事をしなければハンガリーは豊かになれない」と、腹を割ってハンガリー人社員と対話すること以外に妙案はありません。ただ、我々の側に、一生ロボットのような単純作業でなく、人間の持っている能力を大切に、常にチャレンジし続け、信頼しあえる職業人として、物を作る楽しさを共有できるシステムを作って、働く人を大切に、ともに苦勞するのだという姿勢がないと理解されません。

内容が一部自己批判的になってしまいましたが、この点に触れずに現状の打開はないと思えエッセイにまとめてみました。自己批判ができるのは日本人のすばらしい資質です。この資質を大切にしながら、ここから出発していきましょう。このような問題を議論したり、情報交換する場として、労働部会を活用したいと考えています。皆さんのご意見や経験談などを寄せていただき、活発な議論を行いたいと考えています。

(たかね・ともみつ 相川ハンガリー)



人間万事塞翁が馬

ずつ日本学の世界にも入ってきています。

2010年に、先生と友達、私も含めて、皆が驚いたことに、岩手県の「高野長英夢物語大賞」というエッセイ・コンクールの大賞を獲得しました。「チェンゲの死」という短編小説はなぜ好評を得たか、今でも分かりません。私はエルテ大学に入学する前、故郷のデブレツェン市にある大学のメディア学科に通い、新聞記者になりたいと思っていました。大学で記者として活動していましたが、物書きとしては自分に不満を持っていました。「ハンガリー語だとなんだか感じていることが書けないなあ…」と思っていました。こう悩んでいたころ日本語を勉強し始めました。日本語では書きたいスタイルで小説を書けましたが、それはやっぱり日本語でもハンガリー語でもない小説になってしまいました。ところが、夢物語大賞は本当に夢のように実現しました。ハンガリー人である私の気持ちや考えは、母語よりも日本語の方がもっと表現できると気付かせてくれる大変良い経験でした。

そして、同年の秋、大学の前期が新たに始まったころ、また運命のような出会いが起きました。マヤ(ハンガリー日本学生友好協会、www.ilovejapan.hu)の一員になったのです。マヤは2009年に創立された組織であり、日本人とハンガリー人の交流を応援したいという思いを持ち、多くのイベントを主催しています。マヤは私もしたいことをすでに頑張っていたので、参加することにしました。私は現在、記者としての勉強をホームページの編集者として役立てています。

2011年の春の大震災はひどく悲しいことで、世界のそれぞれのところと同じようにハンガリー人の多くも「私にできることがあれば、日本のために全力を尽くしたい。」と思い、みんなが一つになって遠くから日本を応援しました。そのとき、マヤはリスト音楽院の日本人留学生から提案を受け、一緒に義援金募金のためのコンサートを主催しました。みんなまだまだ未熟で、小さい

エッセイ

チェンドム・アンドレア

ことしかできない学生ですが、いずれ日本人とハンガリー人の交流のための活動ができるよう成長したいと思っています。

本当は、「ハンガリー人として生まれた私は、日本とどのような関係があるのだろうか。私一人に何ができるのだろうか」とよく悩んでいます。しかし、あの時、心の底からひどく悲しく、たとえ無力でも役に立ちたいと強く思いました。そして、リスト音楽院の学生と、素晴らしいピアニストであるヘゲデーシュ・エンドレとドラフィー・カールマンの心のこもった演奏を聴きながら、「このメロディーが日本の被災地に届きますように」と祈りました。

読者の皆様は、この記事をお読みになって、「しかし、なぜ人間万事塞翁が馬という題名なんだろう」と思っているかもしれません。私は、特別な理由もなく、自分でも理解できないことですが、人に対する不安を子供のころから持っています。それは、おそらく皆が持っている不安ですが、私はその不安をはっきりと感じてしまい、この人生で悪いことばかり起きると思っていました。でもある日、「もういい。だれも助けてくれないなら、一人でやるしかない。しなくちゃいけないことをやるんだよ」と決心できました。こうして、最初は一人で歩み始めた道が、だんだん一人ではなくなりました。子供の頃、単に日本語の響きに魅了された私がずっとするべきだと感じていたことは、「日本語を分かりたい。日本語を話したい。」というシンプルな気持ちだけでした。でも今、日本に対する気持ちは、それだけではありません。ですから、何が起るかわからない、と日本語を話せるようになってから、ようやく心から感じるようになりました。



日洪会話倶楽部

チョダーシュ・ジュラ

語会話を練習するだけでなく、日本人とハンガリー人が互いに理解し合うことも大事にしたいと思います。

もう1つはバンド活動です。2年半前から、東京オールハーズという在日ハンガリー人のロックバンドに所属しています。年に2〜3回くらいライブを行います。そのとき日本人とハンガリー人のお客さんが一緒に楽しんでくれて、とてもいい雰囲気です。バンドに入れてもらったことは夢を実現するための一歩と思っています。将来は、ハンガリーと日本の間の文化、特に音楽交流に関係する仕事をしたいです。交流と言っても、事務所で働くのではなく、私自身が音楽を作ったり、演奏したりして、国の間の音楽交換に生かしたいです。子供のころから作曲に関わっていて、いまでも「日本の音楽大学に入学する」ということをたまに妄想してしまいます。

日本の音楽のどこがいいかというと、他の国にはあまりないジャンルなどがとても楽しいと思います。時代で言えば70年〜90年代です。昭和後半の歌謡曲なら例えばマツチ、桜田淳子、榊原郁恵、アニソンだったら超時空要塞マクロス、セーラムーン、ラブひな、特撮だったら宇宙刑事ギャバンなどです。一番尊敬している作曲家は久石譲、坂本龍一、菅野ようこの3人です。

日本の食べ物で一番好きなのはうどんです。でも日本の料理は多種多様で全体的に好きです。うどんの他にはお好み焼き、す

き焼き、ラーメン、ギョウザ、お寿司、カレーなどもよく食べます。それから、ちゃんとした料理とは言えないですが、日本のおせんべいが大好きです。特に印象に残ったのはぼんちあげ、ばかうけ、かめせんです。口にする瞬間の喜びを伝えようとおせんべいの曲も作りました。日本のおせんべいがいつかハンガリーでも安く手に入られるようになることを心から願っています。

日本に行ったら、まずは天然温泉を巡りたいと思います。特に露天風呂に関心があります。どちらかというと日本の都会よりは、田舎の方が憧れます。東京、大阪、名古屋などの大都会も様々な文化があつてとても楽しそうですが、私はもともとちょっとおじさんのような「のろい」性格ですから、都会のアクセル化したリズムはだめかもしれません。

日本語を勉強していて、たくさんいいことに出会いました。日本人だけではなく、ハンガリー人の友達もいっぱいできて、とても楽しい生活を送るようになりました。完璧な日本語を喋れるようになるより、日本人と交流しながら、自分の国を理解して、成長して行きたいです。

日洪会話倶楽部: nikkoukaiwa@gmail.com/
東京オールハーズ: http://tokioaruhaz.jimdo.com/

編集部よりのお知らせ

「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての原稿を読むことができます。 <http://www.danube4seasons.com>

皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしています。

原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りください。Word文書あるいは太郎文書でお願いします。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。



日本語を勉強し始めた時点の記憶はかなり薄れていますが、確か今年になって6年目です。

きっかけと言えば、アニメの不思議な世界に感動して、同時に日本の不思議な言葉にも惹かれたというよくあるパターンでした。初めて日本の言葉を聞いたアニメは「天空の城ラピュタ」で、初めは宮崎駿または久石譲の影響が強かったと言えます。1年くらい独学でインターネットのサイトを参考にしたり、アニメを見たりして言葉を学びました。そのあと日本人のプライベート先生について勉強を続けて、結局カーロリ大学の入学試験を受けるまでに至りました。幸いなことに無事に大学に入学でき、2010年にB Aコースを卒業しました。現在ハンガリーでは日本に関しては2つ活動をしています。その1つは日本ハンガリー会話サークルです。一年半前に立ち上げられた「日洪会話倶楽部」では、日本語を勉強しているハンガリー人のために日本人と日本語を練習する機会を提供することを目的にします。会話サークルではただ日本



体験入学に思う

アシュタロシュ 真美

「俺もみんなと同じランドセルが欲しい！」
昨日まで自分の事を「ケンデも～」なんて言っていた息子が、夕飯の席で突然そんな事を言い出した。思わず「俺」だってえ!？」と大笑いする私と両親を横目に、口を尖らせた息子がまた催促する「黒ね!黒のランドセルだよ!」

普段はここハンガリーで補習校1年生に通う息子は、今回初めて日本の小学校へ体験入学した。三月に起きた未曾有の大震災の影響を考えると、本当に日本へ行くべきか否か、直前までとても悩んだ。しかし、年に一度しか会う事のできない年老いていく両親や祖母、兄妹、友人達に会いたい、そして子供達の「日本のおじいちゃん、おばあちゃんの所へ行って日本の小学校に行きたい!!」という言葉が私の背中を押してくれた。行くと決まったら、インターネットで震災の影響を毎日チェックし、夫とも話し合い、納得する形で行く事となった。

日本についてからも、福島第一原発の事故に伴う放射線放出のニュースが毎日の様に流れた。しかし、実家のあるつくば市では健康に影響を及ぼす数値や特別対応の必要がないレベルであるとの事、また親が必要以上に神経質になり過ぎて子供達に不安を与えない事が大事なのではないか、と考え小学校体験入学を開始する事にした。



ランドセル姿で元気に通学。

時差ぼけも収まった一週間後、校長先生に挨拶に行った。長女の乃笑は既に昨年体験入学を経験している為、弟に「給食が美味しいよ!」「体育でいろんな事やるんだよ」と興奮度を上げる様な事を言っていた。初めての校長室では、練習通り(?)の挨拶が出来、無事に入学許可を得る事が出来た。

初日は全校生徒の前で挨拶をし、たちまち有名人に。集団登下校では、皆とお揃いの黄色い帽子にランドセル、正にピカピカの1年生。雨にも負けず風にも負けず、そして暑さにも負けずに往復40分の道程を毎日歩いた。5時間授業があり、3時半ごろに下校すると疲れているにも関わらず、家にランドセルを放り投げて近所の公園へと駆けて行く。そこには学年の違う子供達が、宿題を終えて集まりサッカーや野球、水鉄砲等で遊びだす。ハンガリーで流行っているコマを持っていくと、寄ってきては「飛行機で何時間で行けるの?」「こんにちば」って言ってみて、「俺、英語話せる

よ」(みんなハンガリーでは英語が母国語だとどうしても思ってしまう)と、公園が子供達にとって異文化交流の場となっていた。

掃除の時間も毎日あり、自分達で教室や廊下、トイレ等を綺麗にするといった事が、ハンガリーではない経験であり、新鮮だった様である。張り切り過ぎて雑巾がけの最中、勢い余って顔面を柱に殴打という事もあったが、そんな事は諸ともせず、笑顔で怪我を自慢している息子は少し遅しくもあった。そして、娘にとって何と言っても楽しかったのがプールの授業。みんなが紺か黒のお揃い水着に胸には名前のゼッケンという事に少々違和感を持ちながらも、思い切りプールで楽しんだ。

みどりの丘日本語補習校

社会科の「町探検」という授業では、保護者もボランティアとして一緒に参加した。老人介護施設でリハビリ体操をしたり折り紙を教えてもらったり、また国際貨物ターミナルという所では、大きなコンテナを持ち上げるフォークリフトに乗せてもらい大興奮、税関の仕事も説明してもらい知識も増えた。

こうして毎日生きた日本語の中で生活するという事は、私達親子にとっても大変貴重な経験であり、担任の先生も子供達の興味や探究心をどんどん伸ばしてくれた。こういう経験をしてみようと思えば行けたのも、普段ハンガリーの補習校で温かく見守って下さる先生方や保護者、お友達が居るからだと思う。宿題が嫌である手この手を使って逃げ出す長女も、補修校を辞めたいと言い出した事は一度もない。補習校ではバイリンガル、あるいはトライリンガルの児童達。そして平日は現地校やインターナショナルに

通い、習い事もあるのでどうしても国語の学習は後回しになってしまう。皆、不得意言語が国語かもしれない。年齢も違う。それでも休み時間には校庭にでてきて一緒に遊び出す。いきいきとして楽しそうな姿は見えてとても微笑ましい光景である。同じような境遇同士で、同じ悩みを持ちながらどこかで励まし合い心が繋がっているのかもしれない。

これらの経験が、今回の体験学習で日本の学校に適應できた理由で合った様に思う。「日本で小学校に通いたい、おじいちゃんおばあちゃんに逢いたい」というのは、彼らにとっての動機ではあるが、そこから大きな芽を伸ばせる様にしたいと思う。そしていつか、「あの時、補習校に通えて良かった」、「小学校の体験学習が面白かった」等と言ってくれたら本当に嬉しいと思う。その時はきっと、自分のランドセル姿を鏡に何度も何度も写す、笑顔の息子を思い出さだろう・・・。

ハンガリーにて想うこと

篠塚 哲一郎

私がハンガリーに初めて来たのは今から25年ほど前のこと。その頃前職の銀行で海外の政府や企業宛に東京資本市場の利用をセールスするのが仕事だった私にとり中東欧諸国は重要な顧客でした。中でもハンガリーはいち早く海外の市場での資金調達を進めていたこともあり、足繁く通ったものです。

空港からとんでもなく飛ばすタクシーに揺られ市内に着くとブルガリアや東独と比べて豊かな景色がそこにはありました。インターコンチネンタルやヒルトン、ソフィテルなどの西側の立派なホテルがあり、ホテルの近くには今でもあるマクドナルドがあって、銃に囲まれ、緊張を余儀なくされた東独などから移動すると明るく、人懐っこい雰囲気はほっとしたことを今でも良く覚えています。

それから20年の歳月が流れ2006年の7月、今度はイビデンの駐在員として着任、そして今、早いもので5年が過ぎようとしています。

この5月に弊社フランス工場に異動することとなりましたがこの地で巡り会った数多くの日本人とハンガリー人の温かい手に支えられここまで来られたことを噛みしめ、改めて皆様に感謝申し上げたいと思います。

5年間の滞在を終え、改めて想うのはハンガリー語は難しい!ということとハンガリーという国は知れば知るほど謎が深まっていく国であるということです。

今でもハンガリーに戻る機内で録音されたハンガリー語のアナウンスを聞くたびに、初めて聞く言葉のような、或いはまるで宇宙人の言葉を聴いているような気がすることがあります。5年も住んでいるのにただ単語を並べたような会話で自分でも情けなくなることも一度ではありません。

又、目新しいものを追いかけるブタペストの人達と素朴で古い伝統を守る地方の人達、数学や化学、物理学、経済学に多くの秀でた人材を輩出したハンガリー人と働く意欲を失ってしまった多くの失業者達、悲観的と言われる一方で将来の心配より目先の満足を追いかける楽観的な一面、集団での行動が苦手と言われながら世界的に有名なオーケストラやコーラスでの素晴らしい協調性、歴史上被征服の長い歴史がありながら極めて特異で固有の文化をこれほどしっかりと維持している国、など枚挙にいとまがありませんが、知れば知るほどとてもこれがひとつの国、ひとつの民族であることが理解し切れず謎は深まるばかりです。

これからもハンガリーには何かしら関わりを持っていくと

思いますが、その中で自分なりにこの謎に対する答えを見つけ出していくことが、ハンガリーという素晴らしい国に住む縁を与えてもらったことに対する私なりの感謝になるのか、と想っている次第です。

最後にまだこれからハンガリーに住まれる皆さん、是非ハンガリーの謎にチャレンジしてどうぞ沢山の素晴らしい経験をして下さい。

(しのづか・てつろう イビデン)

篠塚 園子

日本に家族を残してきたこともあり、行き来の多かった私には、ブタペスト生活は4年に満たなかったかと思われまます。こちらに来た当初は、落書きされた薄暗い建物ばかりが目につき、道路はでこぼことして車は走りにくく、言葉は難解で今後の生活はどうなるのだろうと懸念したものです。しかし、その心配も時が経ちこの土地に慣れるに従って薄れ、代わってハンガリーならではの様々な体験と出会える喜びが増すようになっていきました。音楽関係や手工芸、日本関連活動のお手伝いなどなど、気がつくとも毎日のように、なにかしら用事のある充実した日々を送ることが出来るようになっていました。

それもこれも長年この土地に住まれ、生活全般に精通していっしょに日本の方々ともめぐり合うことができたお陰です。それは本当にありがたいものでした。ご自身は苦勞される中で一つ一つ開拓なさってきたことを、準備も十分せず突然現れた私に優しく教えて下さいました。また、私どもと同様に赴任してこられた先輩奥様がたからも、貴重な情報をたくさん教えて頂きました。それは何より心強いものでした。そして今、お稽古や活動を共にするお仲間の皆さんにだけだけ助けて頂いたことでしょう。

また、実際楽器や手工芸を教えてくださいましたハンガリーの先生方には、かけがえのない経験をさせていただいたこと、一生の宝物と思っております。また日本語や書道を習っている老若男女のハンガリーの皆さんと知り合うことができたことは、大変うれしいことでした。皆さんの学習意欲に頭の下がる思いでした。私ももう少しハンガリー語が上達するはずだったので・・・

こういった方々に支えられて、無事にそして楽しくブタペストで生活を送ることが出来ました。この紙面をお借りして、皆様に心からお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

(しのづか・そのこ)

人生の宝物をくれた音楽仲間

リスト音楽院ピアノ科

小黒 絵美香

約1年半前、機内上空からハンガリーの街の灯りを初めて目にした瞬間、美しく輝く景色に魅了され希望で胸がいっぱいでした。入学式が行われた大ホールでのパイプ



オルガンの壮大な響き。自宅近くの教会の鐘の音で目が覚める朝。ドナウ川沿いで感じる風。「ああ、ヨーロッパにいるんだ」と音楽を学ぶのには最高の環境に身を置くことにとても幸せを感じました。

リスト音楽院では尊敬する3人の先生に巡り合いました。ワルツやマズルカ等の舞曲等を勉強するときには先生と一緒に踊りレッスン室を先生とクルクル廻るなど、熱く情熱的な授業に驚きましたが、毎回楽しさと感動との連続でした。たった1音も無駄な音は作らないこと、指先のコントロール、音を奏する先に響きや音楽のスケールを強く広く想像すること、瞬時のキャラクターの変化、細部に意識をすることの重要性を教えてくださいました。

「ピアノはオーケストラ」と言いますが、ピアノ一台で多種多様な楽器の音色を表現する為に同じ強弱記号でも音楽の背景によって変わる腕と指の使い方等の様々なテクニックの中には初めて知ったものも沢山ありました。演奏する上ではっきりとした意思を持つこと、より多くの楽器の音色を知ること、想像力を沸き立たせることはとても重要であり、それらは連日著名な音楽家の生の演奏に触れることやオペラ、バレエの鑑賞によって一層肌で感じる事が出来ました。レッスンの中で先生から求められるアド

ヴァイスに自己の音楽表現はまだまだ足りないと感じることも沢山ありましたが、目標とする表現力や想像の映像はそういったオペラやバレエが日本よりも遥かに身近にあることから、目にするもの、聴くものが私に大きな幸せとヒントを与えてくれ、音楽を豊かにしてくれました。

生活面では1年目は何もかもが零からのスタートで多少のことで落ち込むようなことはありませんでしたが、2年目は環境にも慣れ、悪いことも重なりました。甘い環境には居られない中で自分の弱さの深い部分が見えてきました。そんな時は自分にとって優しい日本をとて遠く感じる時もありましたが振り返ればいつだって一人ではありませんでした。日々の音楽の勉強以外で私のハンガリーでの宝物となったのは多くの友人達との出会いです。

この地に来てからは、音楽留学生以外にも様々なジャンルの方々に出会い、しっかりと芯を持った多くの人と沢山の時間を語り合いました。日本では出逢うことがなかったような方々からそれぞれの人生観等を聞く中でこれまでの私の価値観は大きく自由に広がっていきました。日本人のみならず、ハンガリー人や他国の人も交流を持てたことはとても素敵なことです。一歩外に飛び出すと世界はこんなに広いのだと実感しました。現実的に海外で暮らすということはもちろん危険もあり、不便もある為に「海外は怖い」と思っていた私もここでの友人達との出会いはそうした価値観も大きく広げてくれました。リスト音楽院の中でも友人と室内楽を組み、定期的にコンサートを行いました。お互いを理解し合いひとつの音楽を作りあげる過程の中で時に意見がぶつかるような事があっても、刺激し合い、相手を尊敬する中で共に作り上げる音楽に喜びが生まれました。

こうして振り返り、帰国が目前に迫った今はこの地での周囲の人や景色が数カ月後に思い出となることに現実味がないのが正直なところです。我がリスト音楽院の校舎。生活の中心のなんでもない町並みや、ハンガリー料理。いつも通った夜は高いけれどお昼は安値で食べられるリストテールのランチメニュー。

留学生

留学当初には一口も飲めなかったのに今は味が解るようになったパーリンカ。そんな瞬間全てに多くの友人が居た事、2年の間、落ち込んだ時にいつも受け止めてくれる存在があって帰国を迎えられることに心から感謝致します。留学以前には音楽を続けていく自信を失いかけた数年間もありましたが、どんな時も最悪だと思った状況をも必ず最高のチャンスに変えていけるとの確信を持って進んできました。それは、これまでも現在も尊敬する師匠と良き友人、大きな目的を持って語り合える同志、私の傍に居てくれる大切な存在に恵まれ支えられてきたお陰だと思っています。日本に帰ってもこの地で築いた友情と私の確信は変わりません。

「苦悩を突き抜けて歓喜にいたれ」。ベートーヴェンが残した私の勇気の言葉です。大好きなハンガリーの地の大好きな景色がいつまでも美しく永遠のドナウの真珠でありますように。

ハンガリーで医学を学ぶ

セグド大学医学部

佐藤 英之

ハンガリーでの生活ももう少しで丸5年となります。1年間のブダペストでの大学へ入るための準備コースに通ったあと、セルビア・ルーマニアとの国境近くのハンガリー第3の都市セグドのセグド大学医学部へ入学し、早いもので現在4年生が終わり卒業まで残すところあと2年となりました。



これまでのハンガリーでの生活を振り返り残念に思うことは、せっかくハンガリーに

いながらハンガリー人の友達がほとんどいないこと、そのせいもあってかハンガリー語も全く上達せず、人・文化・歴史・生活など知らないことだらけです。それからハンガリー国内をあまり見て回ったこともありません。

これまでは、自分がハンガリーに来た目的は医師になるためであり、しかもハンガリーの医学部で日本人が勉強するというほぼ前例がない状態で、できる限りの時間を自分の勉強のため、同じ目標をもってやってきた同期・後輩のために奮闘してきました。セグドでは今ではもう50人を超える日本人医学生がそれぞれの目標のため、15カ国以上の国の学生とともに切磋琢磨しています。

また、ご存知の通りハンガリーは立地が良いため、これまで勉強から離れられる少ない時間を利用して17カ国40以上の都市を旅行してきました。しかしハンガリー国内はブダペスト・ペーチ・セグドと入れても7都市しか行ったことがあったことがなく、今後はもう少しハンガリー国内へ目を向けてみようと思っています。

ハンガリーは知れば知るほど興味深い国です。もともとアジア出身ということで赤ちゃんには蒙古斑があるとか、初代王のセント・イシュトバーンはキリスト教を国教としたものの、贈られた王冠の十字架が斜めに曲がってしまってもそれが正しいものだと思い、未だに曲がったままの十字架が国章として残っていると。医療分野に目を向けると、まず我がセグド大学の学長であったセント・ジョージ・アルバートはパブリカからビタミンCを抽出しノーベル賞を受賞しましたし、ゼンメルヴェイス大学の名前にもなっているゼンメルヴェイスは細菌の存在がまだ明らかでない時代に、産後におこる感染症である産褥熱が医療者の汚い手、あるいは汚い医療器具が原因であると考え、現在では当たり前となっている消毒の概念を提唱した人です。またエイズ患者に起こりやすいカポシ肉腫という悪性新生物の一種はカポシヴェールの医師の名前がついた病名です。これらはほんの一部ですが生命科学・医療分野の中にハンガリーの偉大

な歴史を垣間見ることができます。

しかし、大学で勉強していると思うことはこの国の貧しさです。基礎医学分野では日本をはじめ様々な国で研究に携わった方々も多くレベルは決して低いものではないのですが、いかにせん器具や研究・教育に必要な費用が確保できず苦勞しているように思えます。臨床医学では、病院の建物は歴史があるといえれば聞こえはいいですが、近代医療を行うためにはお世辞にも快適な構造とは言えません。かといって全面的に建て直すお金もないというのが現状でしょう。検査や治療に必要な器具類も足りませんし、お金の問題で検査や治療が最小限に抑えられることも多いようです。

しかしそのお陰でいい点もあります。まずドイツ語・英語コースをつくり外国から学生を呼んでいることです。この授業料などが大学の重要な収入源になるわけですが、そのおかげで今はここにこうしているわけで、色々な国の医療事情から生活・文化など友達とのちょっとした会話が国際交流になります。また日本のように医療に無駄があまりなく、実にシンプルで理論的です。それからハンガリーの医師免許は今ではEU共通のものとなり、それは私達には非常に魅力的なものではありますが、それはより医療水準の高い西欧諸国で働きやすくなったことで、ハンガリー人の医師の流出を加速させた結果、人材不足にも苦しめられています。しかしそれが若い医師の技術の高さや経験の多さにつながっていると思います。

私はあと2年で卒業し、日本へ戻り医師となる予定ですが、偉大な歴史や良い点・悪い点も合わせて、ハンガリーで学んだことを少しでも日本の医療へ持ち帰り、医療崩壊が叫ばれる現在の日本の医療界に、ハンガリーから始まりベルリンの壁崩壊へとつながった汎ヨーロッパピクニックのように、多少なりとも私のできる範囲で日本の医療・医学教育がよりよい方向へ向かっていけるよう貢献していけたらと思っています。

留学生

ハンガリーにてビジネスを学ぶ

International Business School

Budapest

辻 佑太

私は現在International Business School Budapest (IBS) で学位取得に向けて勉強しています。こちらでは医学や音楽などで留学される方が多く、ビジネスを勉強していると言うと珍しがられます。一方でハンガリーは投資家のジョージ・ソロスなど経済の分野でも才能を輩出してきた国で、IBSはあまり日本人の方には知られていないようですが、ハンガリー国内においてはビジネス方面では定評がある学校です。授業は全て英語で行われており、75カ国から



生徒を受け入れている名前の通りインターナショナルな学校です。イギリスの大学とも提携しており、卒業時にはそちらの大学の学位及びにハンガリーのクレジットによる学位の双方が得られるシステムになっています。

さて、私がハンガリーにやって来たのには2つの理由があります。まず1つには留学の選択肢を考えた時にコストの面で非常に魅力的であったことが挙げられます。授業料や生活費の安さは予算の限られた私にとっては大きなメリットでした。2つ目は私自身の天邪鬼な性格が人とは違う道を選ばせたのだと思います。十代の頃より人との違いが大切にされない社会で育った私にとって、人と違うことをするというのはささやかな社会に対する反抗であり、私自身の性格を象徴しているとも思います。同時に、このような経験は若い時分にしかできないものであり、ここで学び得るものが10年20年後の自分を形作っていくものだとも思っています。

11

こちらの学校については偶然にインターネットで見つけたことがきっかけで興味を持ちました。新学期の始まる1ヶ月程前に初めて学校の方にコンタクトを取ったのですが、必要書類なども迅速に準備していただき、入学及び滞在許可の手続きは非常にスムーズでした。学校には他の日本人はいませんが、その分興味を持ってくれます。学校にはハンガリー人の生徒も多数在籍していますが、全般的に彼らは論理的な思考力やディスカッションのスキルなど日本の教育環境で育ってきた私にとっては学ぶことも多く、非常に良い刺激になります。以前にシンガポールで勉強していたので、アジア系以外の生徒が多いという環境がとても新鮮であり、また多くの学ぶ機会を与えてくれます。また勉強と仕事を並行している生徒や交換留学のプログラムで他のヨーロッパの国から来ている生徒など違った環境の人達と学ぶのも非常に有意義です。私は編入という形でこちらの学校に来ましたので結局1年で学位を取得できることになっていますが、卒業論文など大変な課題も多く、短い中にも身の詰った学習ができたと思います。

生活面に関しては良かった部分また逆の部分がありますが、新しい経験ができたという点においては押並べてよかったと思います。黄昏時のドナウ川沿いや真夜中のVarosligetはとても素晴らしいです。そしてエンターテイメントが安く充実していることも、非常に嬉しいことでした。殆どの劇場やコンサートホールでは学割により格安でチケットが買えるため、時間のある時は暇をもて余すことはありません。また東日本大震災の後には様々なチャリティーイベントをさせて頂くなど貴重など体験も出来ました。言葉を勉強する時間があればより充実した生活を送れたのかとも思いますが、様々な局面で私を気遣ってくださった方々には非常に感謝しています。またこれを機会にこれからもハンガリーの方々と交流を続け、より多くの日本人の方がハンガリーに興味を持ち、且つ文化や経済面で交流を深めていく一助を担えればと思っています。

留学と仲間

センメルヴァイス医学大学

佐々木 洋介

私にとってこのハンガリーの留学は1つのチャレンジでした。

なぜなら私の1番の苦手科目は英語。中学、高校では英語ができないことで有名でした。だから私に一番いつかわくわくしない言葉が「留学」で、私にとってハンガリーへの留学は、今までの人生で最大の無茶。身の丈に合わない決断だと思っていました。

今でも、日本に一時帰国するたびに友人や恩師にも海外で生活できていることを不思議がられます。

しかし留学生生活を始めて今まで何の問題もなく過ごしてきたわけではありません、不安や悩みは絶えませんでした。それでもハンガリーで今まで生活してこられたのは、仲間という存在があったからだと思います。医学部の入学試験の直前、英語が苦手な私に口答試験の練習相手になってくれたドイツ人の友人がいました。その友人は同じ試験を受けるのに、私に数時間もの時間を割いてくれました。日本人の友人には文法を直前に叩き込んでもらいました。大学に



無事に入学した後も、多くの友人に支えられて今の自分があると思っています。語学力が十分にあるというレベルではまだまだありませんが、ハンガリーに来た頃よりは格段に成長したと思います。

私はハンガリーに医学を学びに留学していますが、それと共に留学を通して、日本人も含め多くの国々の何事にも変え難い仲間に出会えることができました。一生の付き

合いになるだろうと思う友人もいます。本当にこれは人生の財産だと思っています。

何事であっても、何かを成し遂げることは簡単なことではないと思います。無論、個人の努力なしではどんな夢も目標も成し遂げることは難しいでしょう。私の留学生活におけるそれは医者になることです。もしかしたら本当に強い人は、1人でその困難を乗り越えられるのかもしれませんが。でも私は決して強い人間ではありません。だから私にとって仲間は大切な存在だし、この留学生活を通してその偉大さに改めて気づかされました。これからの医者への道も国家試験など決して甘いものではないと思いますが、仲間に甘えきることなく大切に、互いに切磋琢磨し夢の実現に向けて頑張りたいと思います。

そして、これから同じ道を志す人にも、日本から離れた国での生活や勉強など、いろいろな不安があると思います。先日も今年の入試に見事に合格した後輩の1人が、これからの大学生活と勉強に不安を抱えていました。今度は私が仲間に支えてもらったように、後輩に先輩としてではなく、同じ仲間として私にできることがあったら力になってあげたいと思います。私はこのハンガリー

の留学生活で医学と人生を学んでいると思います。

最後に私事ですが、常日頃からお世話になっている方々には、この場を借りて改めてお礼申し上げます。これからも初志貫徹の気持ちを忘れずに、これからも夢に向かって邁進して参りたいと思いますので、これからもご教授の程よろしくお願い申し上げます。

2011水球ワールドリーグ アジア・オセアニア予選レポート

長沼 敦

日本の水球は、今年「勝負の年」を迎えています。1984年のロサンゼルス五輪以来遠ざかっている、オリンピックの舞台へ返り咲くため、2012年1月に開催されるロンドンオリンピック・アジア予選を何としても勝ち抜かなければならないからです。現状の勢力では中国、カザフスタン、日本の3カ国で出場1枠を争うことになります。

また、スポーツどころではない方々がたくさんいる今の日本で、自分達が水球をしている真価が問われているように感じます。野球やサッカーのようなメジャースポーツではない水球が、日本の社会に存在する意義があるのか。日本の水球にとって、もちろん私個人にとっても、大きな意味のある一年になることでしょう。

そういった背景の中、今年はじめて迎えた国際大会はワールドリーグという大会のアジア・オセアニア予選です。オリンピック、世界選手権と並び、水球の国際3大会に挙げられている大会です。水球には、ヨーロッパ各国内で盛んに行われているプロリーグと、各国の代表チームが対戦する国際大会があります。プロリーグは秋から初夏にかけて行われ、国際大会は夏の時期に開催されます。

水球の国際大会で最も大きな大会は何といってもオリンピックです。どの国も4年に一度の大舞台へ向け、強化を推し進めています。各国内で盛んに行われているプロリーグは、スポーツ文化、地域活性、企業のコマーシャルなどの目的のほかに、国際大会へ向けた代表チームの強化という一面があります。ただ単純に人を魅了するプロというだけではなく、強化や普及、地域貢献といった幅広く奥行きのある活動が、ヨーロッパのクラブスポーツの特色です。

これをうまく取り入れたのが日本のサッカーで、Jリーグが発足し、ここ数年、目覚ましい活躍を遂げています。日本の水球もこういった良い例に倣っていかなければなりません。

話題が逸れてしまいましたが、今回私が

出場してきたワールドリーグのアジア・オセアニア予選には中国、カザフスタン、オーストラリア、ニュージーランド、そして日本の5カ国が出場しました。このうち上位2チームが6月にイタリアで開催されるファイナルラウンドの出場権を得ることが出来ます。また、ここで中国、カザフスタンを撃破することで、1月の五輪予選へ向け大きく弾みをつけることも大きなテーマでした。

この試合に出場するため、私はハンガリーリーグの終盤、数試合を欠場し、4月末日本へ帰国し、1日休養をとった後、すぐに日本代表チームの合宿に参加しました。場所は私の母校である、日本体育大学の横浜、健志台キャンパス。国内で活動する社会人選手、学生の選手、国外に拠点を置く選手ら、所属はバラバラですが、この「勝負の年」に懸ける日本のトップ選手が一同に集まり、限られた時間の中で、連携を深めていきました。

1週間の合宿を終えた後、最初の試合会場であるニュージーランドのオークランドへ旅立ちました。この大会では全チームと2回ずつ戦います。1巡目がオークランド、2巡目はオーストラリアのシドニーにて行われます。結果は以下の通りです。

- *オークランドラウンド
 - カザフスタン ○10-8
 - ニュージーランド ○17-3
 - 中国 ×6-7
 - オーストラリア ×6-8
- *シドニーラウンド
 - カザフスタン ○11-10
 - オーストラリア ×10-12
 - 中国 ×6-8
 - ニュージーランド ○20-5

4勝4敗 3位

残念です。悔しいです。結果が求められている中、チームの雰囲気は良く、絶対に勝エッセイ

てると臨んだ中国戦。勝ちきることが出来ませんでした。確実にチーム力は上がってきています。あとは「勝つ」ということを学ばなければなりません。

ドングリの背比べに勝とうとするのではなく、応急処置で場を取り繕うとするので



もなく、「圧倒的に勝つ」というような確信を持って、勝負に臨む状態まで持っていくことが今後の課題になります。

これまでの経験から試合に勝つというときは、圧倒的に自信があるものです。不思議と負ける気がしない。その感覚が、一人だけでなくチーム全員がもてるようになること、そうすれば勝つことが出来ます。

ここ2年ほどは、代表メンバーの大きな変動はなく、チームの連係に深みが出て、戦術に幅が出て来ました。その戦術を広げるため新たな術を創ること、奥行きを持たせるため今の戦術を向上させること。深みが出て来た連係をさらに高めるため、基本的な体力や技術を研ぎ澄ませていく作業。オリンピック予選へ向け、限られた時間での絞って、極めて質の高い練習をすることが、圧倒的な自信を生むことになります。

そして技術的なこと、戦術的なことを万全にしたなら、あとは精神の持ち方になります。これも日頃の練習、行動や言動で削り上げることが出来るものです。

私は水球日本代表のロンドンオリンピック出場を本気で信じ、行動しています。客観的に現状を観たら厳しいのかもしれませんが、周りが何と言っても関係ありません。自分を信じて夢を勝ち取りたいと思います。

(ながぬま・あつし)



ゴルフ天国 ハンガリー 高濱 吉廣

ハンガリーに赴任して丸9年を迎えようとしている。ハンガリーでゴルフが出来ると言う情報は持っていたが、ブダペストから約30分という好立地にこれほど雄大で四季折々の景色が素晴らしいコースがあるとは思っていなかった。コースの名前はパンノニアGCC。今年6月上旬迄にプレーした回数は251回、年間プレー回数の単純平均は28回となる。但し、メンバーになった2006年以降では年平均39回で、週一ゴルフで換算すれば9.5カ月相当になる。恥を晒すようで気が進まないが個人記録を紹介しておきたい。平均スコア:107.4、ベストスコア:96、ハーフベスト:45、パーとバーディーの総数は夫々312、18で、1ラウンド平均では1.24、0.07である。バーディーは14ラウンドで1回出る割合となる。因みに平均パット数は39.6である。また一緒にプレーさせて頂いた個人の数は99名に上る。

こんな数字だけを並べても詰まらないので話題を変えよう。古い話であるが南ア駐在時代の経験である。若い世代の人はあまり知らないと思うが、南アのプロゴルファーNo.1と言えば、ゲーリー・プレーヤーであろう。彼はゴルフ界の帝王と呼ばれたジャック・ニクラウス、全盛期は新帝王と呼ばれ一昨年60歳にして全英オープンで最終日優勝争いを演じたトム・ワトソン、そしてつい最近亡くなったスペインのセベリアノ・バレステロス等と並び称され、ゴルフ界で一時代を彩った黒豹ゲーリー・プレーヤーである。G.プレーヤーは勿論、ニクラウスとバレスレロスも南アでプレーを見るチャンスがあった。ニクラウスのグリップまで頭を下げてパッティングする馴染みの姿、バックスピンを掛けてピン横にピタリと付けたプレーヤーのバンカーショット、バレステロスのエネルギーで躍動的なプレースタイルは今でも鮮明に記憶に残っている。

ここで貴重な写真を紹介したい。一枚はG.プレーヤーと肩を組んで撮ってもらった超お宝写真。左が筆者で当時弱冠31歳、右は伊藤忠の駐在員。写真の上に直筆で「Best Wishes Gary Player」と書かれている。そしてもう一枚はG.プレーヤーCCのスコアカード。G.プレーヤーCCは名前の通りG.プレーヤーによる設計で戦略性に富んだチャレンジャブルなコースとなっている。スタンダードティーでパンノニアとヤーデージを比べてみたら、以下の様にほぼ同じである事が分った。

	アウト	イン	計
パンノニアGCC	Par 72	2987m	2987m 5969m
G.プレーヤーCC	Par 72	2967m	2993m 5960m

南アでも日本人会のゴルフコンペが年12回毎月開催されている。年間を通して同じコースが使われていたが、上述G.プレーヤ

ーCCが完成した1980年は、このコースで一度コンペが開催された。スコアカードに拠れば、1.5ラウンド回っており、結果は48、55、46。当時は現在の様に飛びや方向安定性を研究し尽くしたハイテククラブは無く、トラディショナルな柿の木(パーシモン)で作られたクラブを使っており、道具の割には良いスコアだったように思う。パターは現在パンノニアでも愛用しているあの黒塗りの鏝ついた年代物である。

日本人会月例杯のティーオフは合理的であった。スタート前のミーティングは無く事前に連絡される組合せ表で、各自がティーオフに合わせて三々五々集まり順番にスタートしていく。最後の組の者が長時間待つことは無い。参加者全員が顔を合わせるのプレー終了後のミーティング/表彰式の時となる。南アは世界日照時間の長い国であり、雨でプレーが出来ないと言う事はまず無い。乾季は約4ヵ月間全く雨が無く毎日快晴である。雨季でも夕方に短時間のシャワーが来るだけでさっと止む。1年52週ゴルフができると言う事である。駐在員の大半が住むヨハネスブルグは高度1800mで年間平均気温は17℃、極めて快適な国である(最近の事情は良く分からないが)。

話をハンガリーに戻そう。月々の月例杯は日本人会、MSC杯共に参加者が多く過去にない盛り上がりを見せている。他にも4か国対抗、マッチプレー、年齢別対抗等、ゴルフ部としての思い入れとそれを定着させようと言う意思が根付き始めている。一昨年は60歳前後の者が集まりアラ還杯も実施された。部の代表者とそれを後押しする同好者で、時は今まさにゴルフ天国ハンガリーである。



G.プレーヤーとの超お宝写真

最後にハンガリーでの印象深い対戦を紹介して終わりたい。ゴルフの基本は個人競技である。中でもマッチプレーは最も気合が入るコンペティションではないだろうか。小生は何処かで大叩きするためストローク方式よりマッチの方が向いていると思っている。最も記憶に残っているのは、2007年のM氏との対戦である。5ホール残して4ダウン、勝負は決定的とお互い思っていた。しかしそれから奇跡が起こったのである。14番ロングで勝ち3ダウン、15番でも勝って2ダウン、勢いに乗って16番、次の池越え17番ショートでも勝って4連勝しイーブンに。そして18番はハンディーホール、同グロスで上がり遂に逆転1UPで勝を納めた。流れが来たときのマッチは上品な清流では無く。何時止まる分からない激流で表現される流れである事を体験した。

今まさにゴルフシーズン真只中、心行くまで楽しみたいと思っている。

(たかはま・よしひろ 東洋シート)

マラソンへの想い 菊地 智裕

今でも「走ることが好きか」と問われると「好きではない」と答えると思う。しかし、「マラソンは楽しいか」と聞かれたら、「楽しい」と答えるだろう。マラソンは「走る」ことが目的となっている、個人の内なる戦いを続けていく独特な競技と思われた。しかし、一度、マラソンに参加してからは、マラソンへの想いが少しずつ変わってきた。

初めてマラソンに挑戦したのは、30歳のとき。私は沖縄に住んでいた。沖縄では12月の那覇マラソンが良く知られているが、あれだけの長距離を走ることに拒否感があった。しかし、この年に結婚することになり、しかも自分の誕生日に那覇マラソンが開かれることを知り、早速エントリーした。完走できれば良い記念になると思ったからだ。完走するため、その前にハーフマラソンに挑戦することにした。このハーフマラソンは勾配のあるコースでとても厳しく、どうにか完走はしたが、足を引きずりながらのゴールとなった。その1カ月後に迫るフルマラソンに向けて、しっかりと身体を鍛えないといけないことを自覚させられた。那覇マラソン当日はとても良い天気。太陽は出ているものの、あまり暑くなく(沖縄ではこの時期でも20度近くなることもある)、マラソンに最適の日よりだった。無事に完走し、予想していた記録でゴールした。完走は嬉しかったが、それ以後、沖縄ではマラソン大会に参加することはなかった。

昨年4月にハンガリーに来て、いくつものミニマラソン大会があることを知った。このときの私の状況はこれまでと違っていた。ブダペストという地が新たな体験になるだけでなく、息子が6歳となり、本人も走りたいと言うので一緒にエントリーした。いざスタートすると、息子は全速力で進んでしまった。ペース配分を考えさせようとしたが、たくさん応援の人々に緊張し、私の声は聞こえていないようだった。案の定、しばらくすると疲れてきて、ゆっくり走った。走りながらも、ドナウ川の景色と一緒に見たり、話をしながら進んでいった。このようなミニマラソンは初めてであった。ゴール200メートル前ぐらいから、突然息子が全速力で走り出した。それは私に負けないように、そして妻に速い姿を見せたくて行ったようだ。自分の子どもと一緒にスポーツをする。今までに経験したことがない、充実したひとときであった。子どもの成長を感じられ、子どもが頑張る姿を目の当たりすることができる。親として何とも言えない有意義な時間であった。9月にはハーフマラソンにエントリーした。普段は、車や地下鉄などで行動するため、ゆっくり見ることのないブダペストの中心部を走ることによってゆっくりと見ることができた。

今年は既に2回のマラソンを走っている。そのうち一回は息子と走った。去年以上に成長している姿があった。一人で走るマラソンも、その土地を楽しみながら走る楽しさもある。さらに、自分の子どもと行うマラソンは「走る」ということ以上に楽しいことと思っている。これからしばらくはこのような楽しさを満喫するために、ブダペストの地でマラソンを続けていくのだと思う。

(きくち・ともひろ 日本人学校)

私はなぜ走るのか 仲川 寿一

5月に行われたK&Hリレーマラソンに参加したのは三度目である。毎年9月に行われているナイキハーフマラソンにも三度出場した。私が人生においてマラソン大会という名のついたイベントに参加したのはこれだけである。

私はなぜ走っているのだろうか。40歳を過ぎてから走り始めたのであるが、私のように遅咲きのランナーは結構いるのではないかと。学生のときは部活や何やらで散々走らされていたが、退屈で仕方がなかった。しかし、その時に足腰をかなり鍛えられたことは間違いないだろう。学校を卒業してからは、野球やテニスなどのスポーツは続けていたが、走るだけなんてことはずっとしなかった。走っている人々を見て、何が楽しいのだろうと思っていた。

そんな私が、ある日同僚に誘われて気軽に8kmのマラソン大会に出たのがきっかけであった。その時のことは以前にも書いたので詳しく書かないが、何の準備もしないで、しかも二日酔いで人の靴を借りて走った。しかしその時に、人々の声援を受けながら堂々と道路のまん中を走る快感を味わってしまったわけである。

私にとって走る楽しさは、走った後の爽快感と、走る速度で見える町の様である。また、一人でも、いつでも、どこでも、気軽にできることも大きい。

走ってみると、車やバスなどでは決して出会わない風景に出会うことができる。一軒一軒の家や店の趣、その中でたたくむ人々、路地裏の奥行き、大げさに言えばその町の空気を感じることが出来る。しかも歩いて散歩するよりずっと遠くまで行ける。自転車でもいいのかもしれないが、私の場合は距離や目的に応じて両方使い分ける。

昨年の夏、実家の京都に一時帰国したとき、9月のハーフマラソンにむけて毎朝一時間ほど走った。だいたい鴨川沿いの遊歩道を走るのだが、そこはジョギングをする人でかなり混み合っている。そこで実家のある京大前から、今日は銀閣寺～哲学の道～南禅寺～清水寺、次の日は京都駅伝のコースにもなっている白川通り～宝ヶ池、また次の日は京都御所の周り、たまには思い切って金閣寺～嵯峨野辺りまで行ってみようなどと、京都の名所を日替わりで楽しんだ。走りながら久々に見る故郷は涙が出るほど懐かしく、また新鮮であった。夏の朝の爽やかな空気とともにこの町で起きたいろいろな思い出が蘇ってきた。これも走るという趣味を持ち始めたからであろう。

旅行や所用で他の町に行っても、少しの時間を見つけてできるだけ走る。飛行機のトランジットで一泊せざるを得なくなったヘルシンキでも、全く知らない所をわくわくしながら走ったのを覚えている。

ブダペストでは、マルギット島のジョギングコースを走ることが一番多いが、京都と同じように名所巡りをしてみたり、市民公園を回ってみたり、ヤーノシュ丘の方まで行ってみたり、その時の気分でするコースを変えている。一つの難点はブダペストの冬は寒すぎて、外を走る気がしないということである。しかしそんな軟弱なことを言っているのは「走っています。」なんて胸を張って言えないのかもしれない。取りあえず気候の良いこの時期にできるだけがんばって走ろう。

(ながかわ・としかず 日本人学校)

スポーツ行事・運動サークル情報

2011年春季ソフトボール大会の結果(商工会主催)

優勝:セグドドクターズチーム、準優勝:デンソーチーム
3位:アルパインチーム

ゴルフ部

1. 月例会成績(何れも PANNONIA Golf Course)

	優勝	2位	3位
第1回 3/27	柿崎(スズキ)	清水(スズキ)	飯尾(大吉)
第2回 4/10	飯尾(大吉)	畑山(ソニー)	勝川(リョウワ)
第3回 5/8	金広(ユーラシア)	柿崎(スズキ)	栗原(スタンレー)
第4回 6/5	坂梨(丸紅)	成沢(伊藤忠)	石橋(住商)

2. 第14回「大吉杯」ゴルフマッチプレー選手権途中経過

6月15日現在
準決勝:○ 柿崎(スズキ)2&1 平松(住商)
< 柿崎選手、決勝進出 >

準々決勝:成沢(伊藤忠) vs 坂梨(丸紅)
町野(スズキ) vs 飯尾(大吉)

3. 第5回PANNONIAワールド・カップ:

欧州、アメリカ、韓国、日本 選抜
5月28日 3位:日本選抜チーム(優勝:ハンガリー選抜チーム)

ランニング情報

秋のレース予定は以下の通り。

申し込みは日本人学校か、盛田(morita.magyar@gmail.com)

9月4日 NIKEブダペスト国際ハーフマラソン
子供用のエキシビジョン、リレー協議あり
10月2日 Sparブダペスト国際マラソン
子供用、リレー、30kmなどの種目あり

バドミントン部

毎週日曜日に2時間程度の活動をしています。女性と子供も若干いますが、運動不足の素人おじさん集団です。はじめの30分間は練習、その後ダブルスの試合を行っています。経験者が少ないので、週末の運動不足解消という気持ちで続けています。ラケットは会場で貸し出し出来ますので、室内シューズを持ってきて頂ければいつでも参加可能です。参加費は、当面1,000HUF/大人(子供はタダ)でやっています。興味のある方、連絡ください。

- ① 現在の部員数 大人:15名(女性は2名、他に時々参加の方が10名ほど) 子供:3名(小学5年、3年、1年)
- ② 活動場所と時間帯:日時 毎週日曜日の午後4時から2時間
場所:中学校体育館(ブダペスト2区、Kokeny u. 44.)
- ③ その他の活動:ウィーン日本人バドミントンクラブとの交流会飲み会
- ④ 代表の名前と連絡先 代表者:升谷(連絡先: hujpbad@gmail.com バドミントン部専用メールアドレス)

テニス部(土曜テニス)

1. 練習

(1) 時間:毎週土曜日 PM3:00~6:00
場所:ヴァーロシュマリテニスコート。メンバー登録人数:8名
コート:クレーコート(2面使用)

(2) 練習内容

PM3:00~3:30 ウォーミングUP(2面使用)
※ペアになってストローク
3:30~6:00 ダブルス試合形式
・人数が8名以上の場合6:00まで試合
(それ以下の場合1面を練習コートとして使用)
・参加者は初級者から経験者まで参加。
会員外のスポット参加歓迎
・夏のみ:雨天中止あり。

2. 試合

・ブダペスト内の2チームによる交流戦---'4/16 くじによりダブルスのペアを決め、リーグ戦⇒トーナメント戦で開催。

・送別テニス大会

3. 今後の試合予定

・ブダペスト内の2チームでの交流戦(春・秋)
・親睦テニス大会 3都(ウィーン・ブダペスト)の対抗戦

4. 今後のイベント予定

・新年会 送別会

テニス部(日曜テニス)

1. 日時・場所

毎週日曜日 AM9:00~11:00
場所:マッチポイントテニスクラブ(マンムートショッピングセンター1棟&2棟の間の道を山手側に行ったところ)
登録参加人数:9名(男性7名、女性2名)
使用コート:クレーコート(2面)

2. 練習内容 ※雨天中止(夏季のみ)

・30分のウォーミングアップ(各自ペアにてストローク & ボレー練習)
・4ゲームマッチの試合

3. 各種イベント

・交流戦--- 土曜チームとの交流戦
(相互チームでペアを組み、リーグ戦⇒トーナメント戦)
・送別会--- テニス試合&送別会
・ウィーン&ブダペスト交流戦(2011/6実施予定)
・バーベキュー 新年会&忘年会

4. その他

日曜テニスチームでは初心者・経験者が和気あいあいとテニスを楽しんでいます。ご興味のある方はぜひ参加下さい。
連絡先:的場 e-mail:h-matoba@exedy.com
携帯:+36-30-487-1970



春季ソフトボール大会開会式 大使ご挨拶

春季ソフトボール大会



2011年水球ワールドリーグ戦 右から二人目が長沼選手

インターネットで人生の楽しさを広げましょう！ オトナももっと遊ぶ時代

人生に夢と輝きを BYOOL SNS ~The Best Years Of Our Lives~

BYOOL SNS (Social Networking Service)は、大人が楽しめるユーザー参加型のWEBサイトです。スマートな大人が集まるグローバルな知的空間を目指しています。現在、10ヶ国の海外に住む日本人が参加しており、国を超えて、文化や政治・経済始め、幅広い分野において、情報発信、議論を行なっています。あなたの知的好奇心を満たしてみませんか？

★参加方法：事務局まで参加希望の旨、メールをお願いします。招待メールをお送りします。

BYOOL事務局 Email: admin@byool.com 「BYOOL Bloggers」 <http://www.byool.com>

★お問い合わせ：上記事務局アドレスまでお問い合わせください。

日記・エッセイ



自分のページを持てる。
日記、エッセイ、ブログ、
記録として。

コミュニティ



同じ興味・関心を持つ
仲間の交流の場。
OB/OG会にも。

豊かさ・輝き



様々な人の意見・情報のシェア、
そこから生まれる新しい
発見や気づきが、
人生を豊かに輝きあるものに。

安心・安全



無料会員制。
SNSのメンバーだけが利用
できるクローズドなサービス
なので、安心安全。

書き込みはすべて非公開にできますので、スケジュール管理や、何か自分の記録をつけたり、コミュニティをグループの連絡用に使用していらっしゃるメンバーもいます。

BYOOL Selection

BYOOLでは、品質にこだわり抜いた無農薬・有機栽培の緑茶知覧茶・有機緑茶と、コクのある味わいの知覧茶・深むし茶を皆様にご紹介しております。

国内でも有数のお茶の産地として知られる鹿児島県知覧町の、全国茶品評会などのコンクールで、上位入賞経験を持つお茶園から、直接取り寄せました。環境に優しく、そして、人に優しいお茶で、心落ち着かず優雅なひとときをお過ごしください。 **BYOOL Selection:** <http://byool.open365.jp/>

たくら DEIGN

CI、広告、ロゴ、ホームページ等
名刺1枚からご希望の言語にて
デザイン致します。

各種パッケージ、インテリアのデザイン、
内装工事、翻訳から印刷まで
幅広く受け承っております。
お気軽にお問い合わせ下さい。

SAKURA DESIGN: info@innerdesign.hu
Inner Design Group · 1021 Budapest, Bognár utca 7.
Tel/Fax: 1-200 3213 · Mobile: 06 20 480 4431

www.innerdesign.hu

Propart Hungary Bt.

各種コンサート企画・製作・国際交流イベントを
中心とした業務の運営。ハンガリーを拠点にグ
ローバルな企画・マネージメント展開を行って
います。お気軽に、御相談下さい。

- ・音楽企画/マネージメント
- ・若手音楽家の育成サポート
- ・国際交流事業企画運営
- ・留学/音楽研修サポート
- ・短/長期賃貸物件仲介
- ・各種通訳
- ・翻訳サポート
- ・買い/レンタルピアノ仲介
- ・輸入/輸出楽器仲介

ハンガリー国内出張演奏、
各楽器講師紹介なども随時承っております。

Propart Hungary Bt.

Address: 1089 Budapest, Kőris utca 25. II/6
Tel&Fax: +36-1-786-7846
Mobil: +36-70-3815548
e-mail: propart@chello.hu
web: <http://propart.client.jp/>

Propart